

「都下」呼称に問題提起

文人の
武蔵野

三浦朱門（1926～2017年）は、1978年、自筆年譜に「東京府下豊多摩郡東中野」で生まれたと記述しています。「東京府下」の記述には、太宰治が39年に移住した三鷹を「東京市外」と強調したのと同じくらい強い思いと地政学的な認識があったのではないのでしょうか。

三浦朱門 ⑪

「東京人」という雑誌の特集「新東京文学散歩」の中で三浦は、「武蔵の国の先進地域が、今は東京都下というところになった」と「都下」という呼称をめぐる問題提起をしています。彼に言わせると「何故に都内を上と見て、都下と言わねばならないのか。第一、土地の高低からすれば、いわゆる旧多摩地区は都内より高い土地だから都上と言ったってよいのである」となります。三浦が大学で専攻したのは言語学です。卒業論文のテー

マはボナペ語でした。学生時代に国木田独歩ゆかりの婦人画報社で社長から漢詩を学び、南島の言語を選んだ背景には、旧制中学時代に読んだ中島敦の影響が認められます。

戦時下のことです。16歳だった三浦は1942年に発表された中島の「光と風と夢」を読み、「嵐の直前に黒雲が切れ、そこからオレンジ色の夕日がのぞいているような感じがあった」と年譜に記しました。

「光と風と夢」はサモア島で「ツシタラ」（サモア語で「物語の語り部」の意味）になろうとするステイーヴンソンの生活を描いた評伝的な作

三浦朱門が旧制中学時代に読んだ中島敦の「光と風と夢」（武蔵野市で）



品です。「山月記」などのような漢文体の小説とともに、「嵐」のような時代にあつて文学の良心を示す作品として評価されています。

ステイーヴンソンは、「宝

島」や「ジキル博士とハイド氏」などを著した英国の作家として知られていますが、「白人」に侵略されたサモア島のことを理解しようと努めネイティヴになろうとさえします。「白人」と「インディアン」の関係性を参照して東京と武蔵野の関係を描いた三浦の小説「武蔵野インディアン」の原点をそこに見いだすこともできそうです。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。